引する人材養成が大学院に求め

また知識基盤社会を牽 知識生産のあり方が





2 書く、 の向上のための教育 キル補強と、専門家レベルへ 論理的に考えるなどの基礎ス 聴く、議論する

異分野交流、問題解決、 などの経験を与えることによ

学院共通教育を考える

よいのか。 通教育の実施に向けて動き出し えて整理してみたいと思います。 なのか、どのような教育形態が また。背景は何か、なぜ「共通」 大学院の実情 名古屋大学は昨年、 国内外の事例もふま 大学院共

学院教育振興施策要綱の改訂: ます。昨年も、中教審答申、大 ぶりには目ざましいものがあり ょう。たしかにここ数年の推進)―ディング大学院事業発足な 行政的要請は1つの理由でし

の増加による意識の変化や学生 教育解体の影響も指摘されてい の学習履歴に多様性が増したて でも、ここで見ていきたいの もう少し本質的な要請です。 従来の大学院教育のまま 学部段階における教養 大学院生数 れているとも言えます。

新たに求められる能力

そう感じている関係者は少なく

では修了者の水準を保てない

改革の理念

他方に、

つこと、異分野をつなぐこと、 することが不可欠です。 異なる状況や複数の役割に対応 に携わる者には、広い視野をも このような状況下で知的生産

られるようになったという社会 ています。 世界的なもので、大学院教育改 の変化があります。この変化は 革もまた、各国が模索、試行し

このことは「モード2型知識牛 強化されると考えられています。 問題解決、課題達成のために知 組織に所属する人々が、特定の てきました。 力を結集することによって実現 知識基盤社会は、異分野や別 というキーワードで語られ や「オープンイノベーショ

のに

「移転可能スキル」があり

ために必要な技能をまとめたも

専門知を多様な文脈で生かす

合された新たなアイデンティテ

顔を使い分けつつ、それらが統

ィを築いています。

る相手も様々です。いくつかの

しての立場などがあり、協働す

会的状況に対する専門家個人と

雇用される者としての立場、

社

野の一員としての立場、大学に

ます「かわらばん2008年夏

ています。イノベーションを起 さまざまなセクターが知識基盤 ョンが起きやすい社会へと変革 こせるだけでなく、イノベーシ 社会を牽引する人材を必要とし けのものではなくなりました。 できるような人材こそが求めら しかも、知的生産は学術界だ

目を向けるべきは、

日本の大学院教育では

議論しています。

語を用いて人材育成のあり方を 欧州科学財団やOECDもこの アウトカム指向、コンピテンシ

昨今の大学における

指向と相まってか、現在では

換えるならば、 的です。教育内容に即して言い 教養教育の代替、さらには移転 院教育に期待されるものは多層 可能スキル育成と、日本の大学 研究室教育の補完、従来の学部 院生増加と多様化を踏まえた つぎの3点に集

専門家としての生き方や判断 を支えるような教養教育、 ヤリア教育 +

シップ(先方は企業とは限りま ミナーだけでなく、インターン に取り入れられています。 めた大学があります。

教育である意義がここにありま 会となっている点です。「共通 院生が異分野交流を経験する機 ときに社会との接点ももって が学問分野を超えて提供され 特筆すべきは、これらの教育

経験が欠かせないのです。 となっている点も注目に値しま できたりする参加型の学習形態 に取り組んだり、それを追体験 多様な知を結集して問題解決 スキルや意識の育成には

かわらばんへの皆 アドレスまでお寄 POD20 平成 23年 10月 26日~30日に、米国アトランタにお Development Network in Higher Education (高等教育 多くの国々の大学から教 せくださ さまのご意見 が参加しています。そのため、FDやSDに関する各大学 の取り組みについて情報を収集したり、意見交換したりす ることができます。 (1 日米のシラバスには大きな違いがあります。日本のシラバ

私は、シラバスに関するセッションに参加しました。実は、 スは、アメリカでは、カリキュラムガイドなどと呼ばれて いるものです。日本では、1 科目あたり、A 4 サイズで2 分の1ページ程度が割り当てられ、それらを冊子にまとめ ています。しかし、アメリカのシラバスは数十ページあり、 初回のイントロダクションの授業で学生に配布されるもの です。毎回の講義の内容や参考文献が詳細に記述され、成 績評価の方法も具体的に書かれています。セッションでは、 理想的なシラバスの構成、シラバスの外部公開の必要性と リスク、シラバスの承認方法、シラバスの著作権・所有権、 などが議論されました。

他にも、ファカルティ・ディベロップメントや、 5日間という短い研修ではありましたが、 国の方々とコミュニケーションをとり、 多くの知見を得る って大きな財産となりました 私にと 今回の研修を契機に、日本の大学の現状を批判的に考察し



挑戦が始まろうとしています。 なる大学院共通教育。 システムを活性化する起爆剤に 待っていることになります。 うまくすれば大学や知的生産 (齋藤芳子) 楽しみな

ありません。 いくであろうことは想像に難く いて教授するわけではないから た院生が、伸びやかに 教員が専門とする 一専門家として 知的な刺激に満ちた空間 一方の教員にとっ 成長して 期待され 分野につ

です。

教育形態はいかに

国内外にすでに取り組みを始 やプロジェクトを通じた ワークショップが積極的 講義やセ

当教員が院生とともに学ぶ」 導を含めた専門教育において繰 す。専門教育と共通教育を両輪 とは専門性の発揮につながりま り返してスキルが活用されるこ を図る必要があります。研究指 いう面がより強まると言われま して設計することが肝要です。 また、大学院共通教育では「担 スキルや意識は定着

ご感想を裏面のEメ

ル

Higher Education Glossary 高等教育にまつわる用語集

インフォーマル学習 Informal Learning

インフォーマル学習とは、組織的系統的に教育が編成されておらず、学習目標や 期待される成果も設定されないなかで、学習者の視点からはほぼ無自覚になされる ような学習のことです。多くは日々の職業経験や生活経験から個人が学習すること を指します。

教育や学習は正規の教育機関以外の場所・形態で行われるものが多々あります。 その代表的な場所は職場です。職務に従事するための前提となる知識・技能は、多 くの場合、入職前の正規教育機関で形成されます。入職後は組織的・計画的な教育 訓練が提供される場合もありますが、それらの機会は限られています。多くの場合、 職務に従事する過程で個人が経験的に知識や技能を習得しています。知識・技能の 内容は職務に直結するものばかりでなく、職場の慣習・規律等に関連するもの、人 間関係に関連するものなど多様です。組織的・系統的なものではなく、多様で雑多 なものになる可能性があります。とはいえ、知識・技能の内容や水準は職務を遂行 する上では有効であり、しばしば不可欠なものです。正規教育機関での学習活動だ けでは獲得できないものもありえます。

このような知識・技能を積極的に評価しようとする取組は近年注目され、活発化 しています。OECD や EU 等でも政策提言としてまとめられており、関連する研 究成果も発表されています。その背景には、職務遂行に有効な知識や技能へのニー ズの高まりの中で、正規教育機関以外の学習の有効性や重要性が着目されているこ とがあります。また、職業資格をもたない人への救済の意味もあります。彼らは職 業をはじめ各種の活動に従事する過程で一定の知識や技能を習得しているため、そ れを評価して資格取得を促すことが社会政策的観点からも重視されています。

ただし、インフォーマル学習による知識や技能の内容はしばしば雑多であるため に評価が難しくなります。また、それが正規教育機関での学習と対等とみなせるか どうかは微妙な問題で、雇用主を含めた社会一般の理解を深めることが必要になり ます。さらに、インフォーマル学習は低コストで実施できるため、教育・訓練関係 の予算縮減の圧力を招きかねない点にも留意が必要でしょう。 (夏目達也)

到着前から準備可能である。正 課が始まる前の準備プログラム

みられまし

たところ、つぎのような特徴が

イギリスの大学の実態調査をし

ている。 明や実用的な情報提供を重視し りも政府通達が優先される。ウ も行うが、 より好む傾向がある。 ェブ上の情報提供が少ないなど 本] 学習や生活に関する 留学生全体に対して説明会 オリエンテーションよ ウェブ上での情報提供 紙媒体の情報提供を

生に対応しているかを知ること

大学がどのような方針で留学

ができます。筆者が日本、

中国

えており、

さまざまなオリエン

世界各国の大学で留学生が増

トリシア・カヴァデール=ジョーンズ(客員准教授)

国境を超えるとき

テーションやサポートが提供さ

ティングも活発である。

活が始まった後のグループミー が充実している。通常の学生生

ています。

その内容からは

加わるのが苦手である、 があります。 などと否定的にみなされること つ東アジア系留学生は欧米の いる可能性にも留意が必要です たとえば、儒教の伝統文化をも 暗記に依存する、 教科書通りの講義を もちろん、 議論に 他の異

交流が成立することを指すのだ

と思います。

近田政博

それは人の移動ではなく、異文

豊かな異文化

高等教育が国境を越えるとき、

るのは容易ではありません。

互助が不可欠である。 の生活において、 事情から、 十分な情報提供はなされるべ 種々の手続きや日々 留学生仲間

生は学習スキルあるいは知的 使って学習していることを忘れ 力が不足しているとみなされる がちなのです。その結果、 国人留学生に固定観念を抱きが ことになります。 たち自身の思い込みを検証 しかも、 留 わ

文化適応を一方的に押し付けて 化を背景にもつ留学生に対して きでしょう。ただし、異なる文

> 文化間でも事情は同じです。 たち大学関係者は

読んでおきたい この1冊 Great Books on University

『絵画をいかに味わうか』

ヴィクトル・1・ストイキツァ著 岡田温司監訳 平凡社 2010年

専門的な考察というよりも、「紆余曲折―知的自伝の 試み」と題された冒頭の 50 ページほどの部分のため 縁的な」まなざしにより、当時の大学の同僚や教員た して、1960 年代のヨーロッパの大学と現代日本の です。そこでは現代を代表する美術史研究者である著ちの姿が描かれています。 1989年にパリで博士論文の審査に至るまでの波乱 ような年齢に達した者にとっては、20歳前後に過ご ていないことに気づかされます。

本書を紹介しようと考えたのは、絵画作品に関する に満ちた40年間を静かな語り口でたどっています。 1960年代に故国から西欧の大学へ留学した彼の「周

者が、1949年ルーマニアのブカレストに生まれ、 このような自伝を読むことの魅力のひとつは、私の かわらず、大学が果たすべき役割は本質的には変わっ

した自己形成期の繰り返しえない貴重な時間を、ほか の人の生涯を借りながらではあっても、再び経験する ことができることにあると思います。また、まさにこ うした時間の真っただ中にある者にとっては、今直面 している課題、さまざまな偶然の出会い、時折訪れる 重要な転機における選択、そしてその時間の意味につ いて、もちろん直接参考にはならないとしても、幅広 い視野から教えてくれるところにあるのでしょう。そ 大学との間には数々の大きな変化や差異があるにもか (木俣元一)

高等教育研究センタースタッフ(2012年1月現在)

センター長 木俣元一 専門領域:西洋中世美術史

教授 夏日達也、専門領域:高等教育学、技術・職業教育論

近田政博 専門領域:比較高等教育学、学習支援 准教授

中井俊樹 専門領域:大学教育論、高等教育マネジメント 准教授

齋藤芳子 専門領域:科学技術社会論 助教

研究員 東 望歩

豊田哲

客員 トリシア・カヴァデール=ジョーンズ

(英国・ポーツマス大学)

金子元久 (国立大学財務・経営センター)

加藤かおり (新潟大学) 山内乾史 (神戸大学) 名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Tel 052-789-5696 Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/